

「吹く」の「フ」① 一意味の分化

袋のことをなぜフクロというのでしょうか。大槻文彦『大言海』では「含みて膨るる意」と説明しています。確かに、袋は中に何かものを入れて(含んで)、膨らむものですから、なるほどと頷ける説明ではありません。

しかし袋を説明するにはもう少し適切な語があります。「葺く」です。この「葺く」は、屋根を葺く、石葺きなどを使いますが、

フク(葺) = 覆う・カバーする

と考えられます。屋根を葺くは屋根を茅などで「覆う」こと、石葺きというのは石で「覆う」ことです。

袋は、物を覆いカバーするためのものですから、フクを元にした語というのがよくあてはまります。フクロの口は接尾語であり、上代では、夜口、妹口、児口、などのように語調を整えるために用いられています。

では、フク・フクム・フクルは無関係でしょうか。これらはやはり関係があります。中に何か物の入った袋を想定する時、

外側 … フク (葺く)

中身 … フクム(含む)

状態 … フクル(膨る)

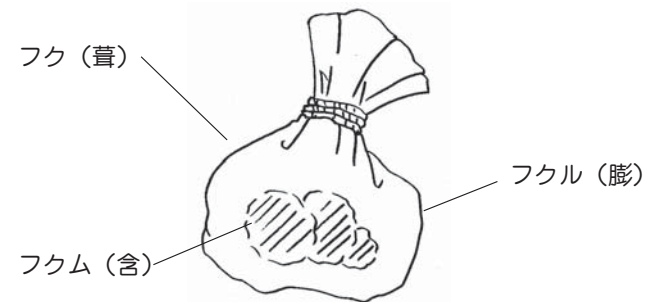
と考えられます。

ハ行音は奈良時代には f 音であったとされており、もっと遡れば p 音だったといえます。プーッと息を吹く、頬をプーッと膨らませる、そういう動作をプという音で表し、そのプを元に、葺く・含む・膨るが作られるわけです。

フトシ(太)は膨らんで太くなっている状態、フサ(房)は花や果実の膨らんだ部分です。また、フタ(蓋)は容器の「覆い」であり、フスマ(襖)は古代には寝具を指す語で寝る時の「覆い」でした。

「吹く」と「袋」

フクロ (袋) — フク (葺く)
 — フクム (含む)
 — フクル (膨る)



「吹く」の「フ」② ーフとハ

「葺く・膨る・含む」を作るフを見てきたのですが、じつはハにも同じ意味の語があるのです。

フク(葺く)=ハク(穿く)

フク(葺く)は「覆う」意でしたが、じつは、ハクも「覆う」なのです。そのハクというのは、袴をハク、靴をハクのハク。袴をハクのは人体を袴という布で「覆う」ことですし、靴をハクというのは、足を靴で「カバーし覆う」ことです。ですから、このハクは「覆う」意の語なのです。フク(葺く)=ハク(履く)だと言えます。

フクム(含む)=ハム(嵌む)

ハム(ハメルの古形)は袋状のものや凹みに物を指し入れることです。手袋をハメルとは、手袋というフクロに手を入れ手を含ませた状態にすることであり、フクム=ハムだと言えます。

北海道などの方言では、手袋をハクといいますが、ハクでもハメルのどちらでも「カバーし覆う」意となるのです。

なお、ハム(食)というのも本来の意味は食物を口にハメル意の語だと考えられます。だから「禄をハム」というのは、うまい物を食べるというよりは、口に物を入れ日々を過ごすニュアンスを持つのでしょう。

フクル(膨る)=ハル(腫る)

ハル(腫る)は、傷などで皮膚が「膨らむ」ことです。「^{フクル}膨る」とは「^{ハル}腫る」なのです。

このように「フ～」の語と「ハ～」の語がほとんど同じ意味の語を作るのです。タ行の場合でもそうでした。これは偶然ではなく、プーと膨れるのプという原初的な一音節動詞が存在し、それが「フク・フクル・フクム」などの語を作る一方、動詞語尾の膠着時に「フ→ハ」の変化が行われる場合があり、そうしてできた語が「ハク・ハム・ハル」であると考えられるのです。

「フ」と「ハ」が同じ意味の語を作る

フク (葺く) = ハク (穿く・履く)

フクム (含む) = ハム (嵌む)

フクル (膨る) = ハル (腫る)



袋に入れることを
ハクと言います。



ハク
(袴を～)



ハク
(靴を～)

「吹く」系の語彙

「吹く」のフは、「包み込む・覆う」の意で、ハ-ヒ-フに渡って右表のような語を作ります。問題となる語を説明しましょう。

フス(伏)を「被せる」の意の語として扱っていますが、病で伏す、茶碗を伏すのフスが「被せる」の意味か疑問に思うかもしれません。このフスはフサグ(塞)を作ります。フサグは穴などを覆いカバーすることですから、元のフスも「覆い被せる動作」と考えられるのです。ハフ(這)はフス(伏)に対応し、伏して動く意です。フム(踏)も足などで被せるように押さえることです。

フカシ(深)という形容詞は動詞フクを元にしています。このフクはどのような語でしょうか。霧が深いというと霧に「覆われている」こと、森が深いは木々に「覆われている」状態です。フカシ(深)のフクは「葺く」だと考えられます。「更く→深い」だとする説がありますが、時間的な語は一般に空間的な語の転用として作られるのです。ですから、もともと「葺く＝覆われる」であったものが、時間的に転用されたとみるのが妥当です。

ヒス(秘)・ヒム(秘)はどうでしょうか。棺桶をヒツギといいますが、じつはヒツだけでもキだけでも棺桶を表します。キは奥津城などのキと同じ語で「囲われている処・もの」です。ヒは「覆い」です。ですから、

ヒ(覆い)ツ(～の、格助詞)キ(棺)

なのです。このヒツの部分独立して棺桶のみならず、お櫃のような箱までも表すわけです。「ヒ(秘)＝覆い隠す」ということで、ヒス・ヒムを作ります。ヒソムではソは強調辞です。

名詞は少なく、純然たる名詞は「^{フエ}笛・^{フサ}房・^{フタ}蓋」くらいです。動詞の名詞化語では、「穿く」がハコ(箱)・ハカ(量)・バケ(化)の語を作ります。ハコ(箱)は「穿くもの」、ハカ(量)は器で分量を知ること。バケ(化け)は「(狐の皮などを)被っている」意です。

フ(吹)は「覆う」意で多くの語を作る

| | フ | ハ | ヒ |
|------------------|---|--|---|
| 吹く | フ(吹)フ(嚏) フ(乾)フク(吹) 名詞 フエ(笛) | ハク(吐) | ヒル(放) |
| ^{ふく} 膨る | フク(膨) 名詞 フサ(房) | ハル(腫) ハル(張) | |
| 覆う | フク(葺) ↳フクム(含) ↳フケル(肥) フク(更) ↳フカム(深) ↳フケル(更) 名詞 フタ(蓋) フサ(房) | ハク(穿) ↳ハカル(計) ↳ハコブ(運) ハム(食) ハム(入) ↳ハメル(嵌) 名詞 は穿く { ハカ(量) ハコ(箱) バケ(化) | ヒス(秘) ヒム(秘) ↳ヒソム(潜) 名詞 ヒツ(棺) |
| ^{かぶ} 被す | フス(伏) ↳フサグ(塞) ↳フセグ(防) フム(踏) | ハフ(這) ↳ハベリ(侍) | |

「振る」の「フ」— 振る・端

「吹く」のフの語の他に、「振る」のフがあってこれもたくさんのハ行語彙を生み出している一音節動詞です。手をフル、棒をフル、風にフルフ(震)等、フ・フルは具体的な振動を表す一方、フリ向く、棒にフル、恋人をフルなど多彩に用いられています。

古代語のフルを理解するには振り子をイメージするとよいでしょう。振り子が左右に振れる、その振れる動作が「フ」、左右に振れ動いた処がハ(端)・ヒ(端)なのです。

フ(振)→ハ(端) : 一音語フの語尾母音を a とした名詞形

このハは、切れ端のようなものの意で、ハ(羽)、ハ(葉)などの語を作り、エッジの意味でハ(歯)、ハ(刃)などの語を作ります。また二音節化してハシ(端)やハタ(端)となります。

ハツ(果つ) ハジム(始む)

ハツ(果つ)はハ(端)を動詞化した語です。同じく、ハジム(始む)も「ハシ(端)+ム(動詞語尾)」でしょう。端を終端とするか端緒とするかで、正反対の語になるわけです。

末尾母音を i にして名詞を作る用法もあつたのでした。母音 a に比してやや強調的で、端くれ、片方に振れたその地点などの意味合いを含みます。

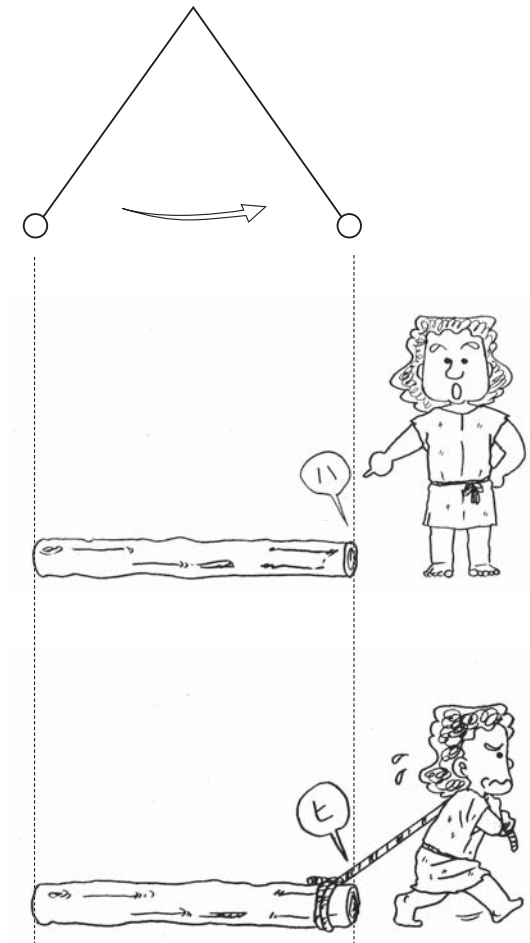
フ(振)→ヒ(端) : 一音語フの末尾を i にした名詞形

ヒク(引く)は、ヒ(端)を動詞化した語で片方向に動かす意となります。

ヒ(端)を基にした語では、「ヒマ(暇)=ヒ(ちょっとした)マ(間・時間)」、「ヒナ(雛)=(一人前でない)片割れ・わっぱ」、「ヒナ(鄙)=辺境・国の端」等の語があります。

また僻む・僻事などのヒは、物の見方が振れている・ぶれているということです。ヒタスラ、ヒタブルのヒタも片方の意で、動きが一方にのみ行われることを表します。

フ(振る)は「2点間を動く」



「振る」の「フ」ー 払う

「払う」はゴミなどを除くために手や棒を振ることですから、フル(振)という動作のカテゴリーに入ります。フ(振)→ハル(払)という語形成があり、さらにハル→ハラフなどと語を作っていくわけですが、ハルがすでに「払う」意なのです。

「晴る」は雲が取り払われているということ。また、「墾る(開墾すること、^{にいばり}今治などのハリ)」は草や雑木などを取り払う意です。「晴る」と「墾る」はもともと区別のある語ではなくどちらも「払う」「払ってあける」ということです。

継体天皇の名は「天国押ハルキ広庭尊」でした。「(押)ハルキ=(押し)広げる」で、このハルは「邪魔なものを取っ払ってスペースを作る」意であり、やはり「晴る」「墾る」と同じ語です。また障害を除きスペースを作ることからハルは「開く」意にもなります。

ハルカ(遙か)は障害がなく広がっている様、ハラ(原)は、障害がなく広がった場所です。

ハク(掃)も「払い除く」意の語で、ハク-ハルはほぼ同意の語です(ナクとナルの対応と同じ)。

雨が降るといふ場合のフル(降)は一見違った語に見えるかもしれませんが、フル(振)のバリエーションです。天から雨や雪が振りまかれたように落ちてくるのが「降る」なのです。まだら模様をフ(斑)というのは「振りまかれたような模様」です。

「振る・払う」と「端」の意味を持つ語を右表にあげました。ヒというのはほとんど「端」の意味です。ヒザ(膝)・ヒジ(肘)は足・腕の真ん中にありますが、折った時に端を作るわけです。ヒタヒ(額)もやはり端なのです。ヒシ(菱)は棒の端で押し潰した(ひしゃげた)形ということで、それゆえにヒシメクとなります。

ヒ(端)は良い意味でも用い、抜きんでいる・頭角を現す意で、ヒヅ(秀)・ヒイズ(秀)となります。

フ = 振る・払う・端

| | フ | ハ | ヒ |
|----|------------------------------------|--|---|
| 振る | フル(振) └フルフ(震) フク(振) フル(降) | ハル(払) └ハラフ └ハラ(原) ハク(掃) | |
| 払う | | ハク(掃) ハル(晴) ハル(墾) └ハラク(開く) | |
| 端 | | ハツ(果) ハユ(生) フ(生) ハユ(蝕) ハツ(恥) ハグ(羽) ハグ(剥) ハル(貼) | ヒ(端) ヒヅ・ヒイズ(秀) ヒウ(秀) ヒウ(削) ヒク(引く) ヒル(引)* └ヒリフ(拾) └ヒロフ(拾) |
| | 名詞 フチ(淵) フモト(麓) | 名詞 ハ(葉)ハ(齒)ハ(刃) ハタ(辺)ハタ(畑) ハタ(端)ハシ(端) ハダ(肌) ハナ(鼻)ハナ(花) ハネ(羽)ハ(羽) ハマ(浜) | 名詞 ヒ(端) └ヒマ(暇、端間) └ヒナ(雛、端ナ) └ヒナ(鄙、端ナ) └ヒザ(膝) └ヒジ(肘) └ヒシ(菱) └ヒシグ └ヒシメク |

(*は推定された語)

「振る」の「フ」— 間・渡る

フ(振)が「端」の意の語を作るのはすぐに了解できると思います。しかしやっかいなことに、このフは「間」の意にもなり、「間を動く・渡る」の意味にもなるのです。

斜めのことをハスといい、ハス交い、ハス向かいのように使います。なぜ斜めがハスなのでしょう。これは、長方形を考えその対角に行くのに、通常辺を伝って行くところを、対角線を「渡る」ように行くということなのです。

一方、ハサム(挟む)は、ハス→ハサムという形で出来た語ですが、この場合ハスは「両端間」を意味しています。

要するに、振り子が点Aから点Bへと振れるように

フ = 二地点間を移動する・渡る・両端間で動く

となるのです。

ハシ(橋)は、渡る意のハスの名詞形です。ハシラ(柱)は天井と床との間に「渡した」棒です。

ふくらはぎのハギ(脛)は膝とくるぶしの「間」です。ハギが間でヒザが端なのですから紛らわしいとは言えます。フシ(節)は区切りとなる端のことで薪をフシというのは等間隔の木材の意です。

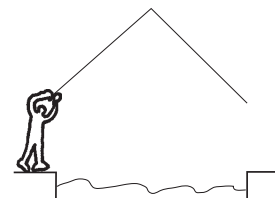
「渡る」意のフからできたヒがあります。ヒ(樋)は古代語でトイのことです。樋口さんの祖先はトイの水の落ちる処に居を構えていたのでしょう。ヒ(樋)は「(水を)渡らせるモノ」です。

またヒ孫、ヒ爺さんといえます。ヒ孫は孫のもう一つ先の孫、ヒ爺さんは爺さんのもう一つ先の爺さんです。このヒは「(世代を)一つ渡った先」を表しています。

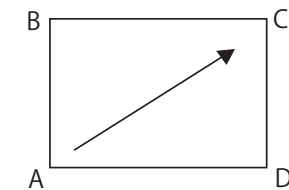
両手を広げた長さをヒロ(尋)といいましたが、このヒは「両端間のスペース」ということで、さらにヒロム(広)・ヒロシ(広)などの語を作ります。ヒル(昼)は朝と夜の「間」です。ヒラク(開)も同じくスペースを作る意です。

フ = 2点間を動く・間・渡る

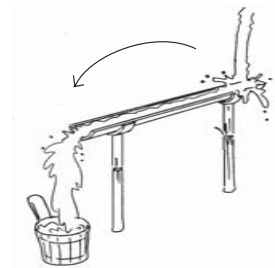
| | フ | ハ | ヒ |
|----|--------------------------|--|---|
| 間 | フ(節) └フシ(節) └フシ(柴) | ハ(場・間) ハス └ハサム(挟) └ハシ(箸) └ハシ(間) ハギ(脛) | ヒ(間) └ヒル(昼) └ヒラク(開) └ヒロ(尋) └ヒロム(広) └ヒロシ(広) |
| 渡る | フ(経) └フルシ(古) フネ(舟) | ハス(斜) └ハシ(橋) ハツ(泊) | ヒ(樋) ヒヒコ(曾孫) |



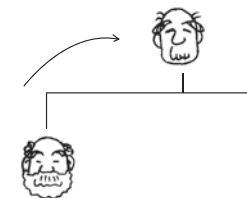
フ(振)が「渡る」意になる



ハス(斜)とは A-C を「渡る」意



ヒ(樋)は水を「渡す」道具



ヒ爺さんは爺さんからさらに世代を「渡る」意

八行語彙の成り立ち

ハ・ヒ・フを語頭に持つ二音節動詞の上代語は『時代別』では 37 語です。このうち活用だけ異なる語を同語とみなすと 34 語です。

右表はこの 34 語を改めて示しました。「吹く」系、「振る」系とあと数語オノマトペがあります。オノマトペというのは、ハヌ(撥)とヒツ(漬)で、これはパシャパシャとかピシャピシャのパ・ピを元にした語です。

このように 2 音節動詞が「吹く」と「振る」からなりそれ以外にはないということは、すべての八行語彙は「吹く」のフと「振る」のフを起源にするということです。フ(吹く)とフ(振る)が 1 音 2 音の簡単な動詞・名詞をまず作り、それを組み合わせて 3 音節以上の語が生成されるのです。

ここでいくつかの語について追加的な説明をしておきます。

まず「春」の語源です。ハルとしてわれわれが知っている語には、
 晴る 墾る ハル(開) 腫る 張る 貼る
 などが、この中に正解があるならハル(開)が妥当でしょう。

ハル(開く) ナツ(草木が伸びる・または春に続く)

アキ(飽く、いっぱいになる) フユ(更く、更けていく)

季節は草木の状態で言うのが最も自然です。春の芽生えで始まり、夏に伸び、飽き(秋)、後は老け(冬)ていくわけです。

なお、「張る」は「振り渡す」(振る系)、「腫る」(吹く系)の両方にとれます。「貼る」は「端る」(端を合わせる)意でしょう。

ハダ(肌)、カハ(皮、カは上、ハは表皮)、ハグ(剥)などのハも「端」、「覆うもの」の両方に解されます。

「生える」意の「フ」は理解の難しい語です。フチ(縁)などの語から端の古形「フ」が想定され、ハユ(生ゆ、端を出す)と同じく、植物が端(芽)を出す意でしょうか。「フ=縁」なのは、フモト(麓)=フ(縁)モト(本)などの語にも現れます。

八行語彙はフ(吹)とフ(振)から生成される

「吹く」系語彙

| | フ | ハ | ヒ |
|-----|----------------------------|-------------------------|----------------|
| 覆う | フク(葺) | ハク(穿) ハム(食) ハム(入) | ヒス(秘) ヒム(秘) |
| 被せる | フス(伏) フム(踏) | ハフ(這) | |
| 膨れる | フク(膨) | ハル(腫) | |
| 吹く | フ(吹)・フ(噓) フ(乾) フク(吹) | ハク(吐) | ヒル(放) |

「振る」系語彙

| | | | |
|-------------|----------------|---|-------------------------|
| 振る | フル(振) フク(振) | ハル(張) | ヒク(引) |
| 振り払う 開ける | フル(降) | ハク(掃) ハル(晴) ハル(墾) | |
| 端・間 | | ハツ(果=端つ) ハユ(生) ハユ(蝕) ハツ(端) ハグ(羽) ハグ(剥) | ヒル(昼) ヒツ(秀) ヒウ(秀) |
| 渡る・経る | フ(経) | ハス(駆・斜) ハツ(泊) | |

オノマトペ系語彙

| | | | |
|--------|--|-------|-------|
| ピシャピシャ | | ハヌ(撥) | ヒツ(漬) |
|--------|--|-------|-------|

「へ」と「ホ」

日本語の起源を問題にする場合、アイウの段の語(ハ行ではハヒフ)について説明がつけば問題の大半は終わりです。エ段の語は ai、ia 等の合成音で後に形成されたものであり、オ段もやや特殊で、エ段、オ段は応用問題と考えられるのです。

ですが、ここではへとホについてもふれておきましょう。基本的にへもホも「端」の特殊なものです。

へはへり(縁)の意味です。へを語頭に持つ二音節動詞は3語しかなく、へグ(折=縁を削る)、へス(押=縁で押す)、へス(減=縁から取る)のようにすべてへり(縁)の動詞化語です。名詞はへ(辺)、へ(舳)、へダ(辺)のように「縁」を意味する語がある一方、イへ(家)の意味のへ、ウへ(上)の意味のへのように、語頭の語が省略された語もあり、食器をへ(饗)というのも意味がとれませんが、これも語頭の省略の可能性が考えられます。いずれにしても一音語は単純すぎて表している内容が乏しく意味がとれない場合があるのはしかたありません。

ホもハ(端)の特殊形で、端から飛び出している形状(穂や鉾)を意味します。母音 o は単に名詞を作るのみならず、「起く」の意を含むように思います。名詞では、

ホ(帆) ホ(穂) ホ(秀) ホコ(鉾) ホソ(臍)

などはいずれも突きだしたものを意味します。ホにはイハホ(岩!)のような強調辞(!マーク)の用法がありましたが、

ホク(祝) ホム(誉) ホル(欲) ホル(惚)

などは、この強調の用法で作った語です。ホク・ホムは、ホ(秀)の動詞化ともいえますが、ホク→ボケル(惚)、ホル→ホレル(惚)のようにな変化からは、「!(強調)」の意と捕らえられていたことが窺えます。

へは「縁」、ホは「端」

へ…語彙

| | |
|----|---|
| 名詞 | へ(辺) へ(舳) へ(竈) へダ(辺) へラ(甕) へ(竈)は火を燃やす処を囲う塀。へ(塀)ツイ(築)。へラは鋤の刃・端。その他、食器をへ(饗)と言っているがヒラ(平)の意かハク(履)の意かと思われるが不明 |
| 動詞 | へグ(折) へス(押) へス(減) へグ(折)はへり(縁)を削ぎ取る意。へス(押)は端で押す意。へス(減)はへり(縁)を取る意。ヒウ(削る)の類。 |

ホ…語彙

| | |
|----|--|
| 名詞 | <ul style="list-style-type: none"> ■穂・鉾などのように突き出たもの ホ(帆) ホ(穂) ホ(秀) ホコ(鉾) ホソ(臍) ホソは(窪んだとも解されるが)臍の緒・出臍 ■ハシ(端)・ハシ(間)の意 ホカ(外) ホド(程) ホカ(外)は端から更に出た処。ホド(程)はハシ(間)の意。 ■その他 ホケ(火) ホシ(星) ホケはヒ(火)の被覆形ホに接尾辞ケを付けた語。星はホ(火)の意かホ(穂)の意かどちらかだろうが不明。 |
| 動詞 | <ul style="list-style-type: none"> ■ホ(!)を動詞化した語 ホク(祝) ホム(誉) ホル(欲) ホル(惚) ■フの語幹形 フ(干)→ホス(干) フ(堀)→ホル(掘) フ(踏)→ホム(踏) ■オノマトペ ホユ(吠) |

ふくれる・おおう
吹く
振る端
渡る間
振る

③ 八行語彙 | 吹く・振る